妙の光（たえのひかり）

通刊70号 **復刊49号**
2005年3月15日（季刊）
角田山妙光寺 発行
新潟県西蒲原郡巻町
角田浜 〒953-0011
TEL 0256−77−2025

春の川

春、境内を流れる川は雪解け水が豊富で、さらに日差しが暖かく新芽の吹くこの季節がとくに心地いい。溜まりにサンショウウオが卵を産み、そしてオタマジャクシも泳ぎだす。この川の水を引く池の鯉が活発にエサを食い始める。

やがて新緑が水面に写り、水量が一定しないのでわずかだが初夏には蛍が飛び、秋には甲羅が10センチ以上ある蟹が海から登ってくる。小さな川だが季節ごとの自然の営みがしっかり感じられる。

その昔は本堂裏手にある神社の下を流れていたことから、正式な名称を宮沢という。小さな川だが暴れ川で、平均四年に一度は氾濫してそのたびに床下浸水の被害に悩まされ続けた。平成三年に県の工事で、現在のように改修されてようやく治まった。以前は悩まされた川がいまとなっては流れに季節を感じ、さらに二つの池に水を湛えてくれるありがたい存在になった。

春の川水が水押し流れゆく　古屋　秀雄

ベトナムの風

小川英爾

休暇をとってベトナムに行ってきた。友人たちと去年の忘年会の席上、忙しい毎日を少し休んで近くて暖かい所に行きたいねという話で決まった。超多忙な新聞記者二人、大学の先生に後輩の住職と私の五人が集まった。仕事を終えて集合した成田空港を午後六時に発って六時間、時差二時間のホーチミン（旧サイゴン）に午後十時到着。実質三日間の滞在が始まった。

ベトナムといえばベトナム戦争と最近経済発展めざましい社会主義の国、くらいしか知らずにやってきた。朝の街に出て驚いたのが、道一杯にあふれるほど走るバイクの数。その多くが昔懐かしいホンダのカブという五十ccのあれ。聞けば十年ほど前までは自転車が多かったのが、今はバイクが中心でしかも五十cc以下は免許が要らない。市内ではヘルメットも義務着けられていないとか。女性も多いが話に聞いた民族衣装のアオザイを着た人はあまりなく、服装は男女とも日本と変らない。定員は二人（？）だが中には一家四人が乗っている姿もある。片側二車線の通りを埋め尽くして流れるバイクの中を、車が申し訳なさそうにかきわけて走る風景はどこかユーモラスで心和む風景だった。

そんな道路で交差点に信号機もあまりなく、たまにあっても守っている感じではない。それに交通整理の警官を一度も見なかった。横断歩道もあるが、ほとんど用を成していない。歩行者はどうやって道路を横断するのか心配になった。その答えはちょっとした流れの隙を見て歩き出せば、全てのバイクも車も必ず歩行者の手前で静かに止まってくれる。だから恐怖感もないし、急いで渡ろうという気にもならない。歩行者と運転手の不思議な信頼感と絶妙な間合いでなんとなく横断できてしまうのだ。

ただ車が左折するとき（日本と逆で車は右側通行）は対向車があるから大変で、ごちゃごちゃになるのだがそれもなんとなく出来てしまうから不思議だ。でもやはり事故は多いそうで、夕方食事に行くのに乗ったタクシーが前の乗用車にドスンと追突した。前の車の助手席から降りてきた人が黙ってぶつけられた所を見

て、たいしたことなかったのかそのまま車に戻って行ってしまった。その間こちらのタクシー運転手は困ったような顔をしていたが、車も降りず相手と言葉を交わすこともなかった。

そんな穏やかな不思議な空気が漂っている、というのがベトナムの一番の印象だ。土産物店に入っても観光地に行っても、一応声を掛けてくるが決してしつこさがない。街頭に物売りも物乞いもいるが、これも他のアジアの国に比べて極端に少ない。大都市ホーチミンのサラリーマンの平均月収が二万円というが、本当に皆心穏やかで静かな人々という感じだった。泥棒もひったくりも喧嘩も多いから気をつけるようガイドに再三注意されたが、ピンと来なかった。

それに印象深いのが食事のおいしさだ。元々が中国の文化圏で一時フランスの植民地だった影響で、中国料理とフランス料理の混ざったのがベトナム料理だという。そこに新鮮な魚、野菜、果物が豊富にあるからおいしいのは当然ということになろう。東京で言えば銀座通りのおしゃれで中規模なレストランという感じのベトナム料理店で、五人がたらふく食べて飲んで日本円にして一万円に満たなかった。現地感覚ではこれでもずいぶんな値段だろうとは思う。

一日かけて南のメコン川クルーズというツアーに参加した。これは期待はずれで、小船でメコンデルタにある島に渡り、そこに暮らす人たちの暮らしを見たり果物を食べ娘さんたちの歌を聞くのだが、これがなんとも中途半端。車で二時間近くかけて行き一時間ほどちょこっと観光をして、昼食を食べてまた二時間近くかけてホーチミン市内に戻った。この辺がいかにも社会主義国というか、一所懸命観光客を呼ぼうという感じがしない。それでも経済はかなりの勢いで発展しているという。

ベトナム戦争の悲惨さを伝える記念館、そして最終日にはひとりで別のツアーに混じって戦争当時の地下トンネルを見学に行った。展示方法はまったく素朴そのものだが、アメリカ軍が村を焼き尽くす光景や、戦車で村人を引きずり走る様子、頭に拳銃を突きつけられて顔が引きつった老婆の姿などなど、痛ましい限りの写真の数々には言葉を失った。さらにジャングルに撒いた枯葉剤で戦争後に奇形で生まれた子供たちは今、成人して施設で働いているという。体が一つで頭が二人の状態で生まれた双子はベトちゃんドクちゃんが日本でも知られているが、別の双子のホルマリン漬けも展示されていて正視できなかった。こうした展示を見ながら戦争の悲惨さを改めて痛感し、現在のイラクに思いをはせた。

ベトナム戦争の際村人がこもってアメリカ軍と戦った地下トンネルが、クチという村にわずかに残されて

いて実際に体験できるようになっている。ジャングルの地下二メートルほどに張り巡らされ、その総延長は一六〇キロに及んだ。アメリカ軍がベトコンと呼んだ当時の村人は平均身長一五〇センチと小柄なうえ、トンネル内部をカンテラの火を頼りにしゃがんで歩くギリギリという狭さ。さらに高温多湿で小さいけど毒蛇もいたそうで、閉所恐怖症というか大抵の人はものの数分で気が狂いそうな不安感に襲われる感じだ。そんな狭さだから仮にトンネルを見つけられても大柄なアメリカ兵はとても入れなかった。現在は観光用に欧米人も通れるよう広げてあるという。

地下トンネルに繋がって密林に覆われた半地下式の会議室、台所と食堂、病院、敵の不発弾から武器を作る工場まで備えていた。そこで村人は畑を耕し市を開き、祭りも催して気分転換をはかりながらしぶとく戦い、とうとうアメリカ軍を撤退に追い込んだのだ。それが今からちょうど三十年前だから当時の村人はまだたくさんいるわけで、一旅行者としてはなんとも複雑な気持ちがする。密林は枯葉剤で完全に消失し、今ようやく日差しが遮れる程度の林に復活しつつあるところだった。

クチの村からさらに車で一時間半、タイニンの町に本山を持つカオダイ教という百年に満たない歴史の新興宗教団体を訪ねた。これが摩訶不思議な宗教で、仏教、儒教、道教、キリスト教、さらにイスラム教までも取り込んだ教えを持ち、信者が全国に二百万人いるという。ただ一回四十五分のお祈りを日に四回行う厳しさが若者に嫌われて、信者は減り高齢化しているとも。なるほど昼十二時のお祈り時間に合わせて見学させてもらったが、若い人はいなかった。

長方形ながらイスラム教のモスクを思わせる天井の高い巨大なお堂の中、大理石の床にきちんと整列して座った信者が、中国風音楽の生演奏に会わせて歌のようなお経のような何かを唱えている。衣装がアオザイ風なのだが、なかでも仏教を信じる人、キリスト教を信じる人など五種類の宗教ごとに形と色が異なり、さらにそのなかでも位によって形の違う帽子があったり、そんなガイドの説明を聞いて驚いた。建物の中央にはシンボルだという人の片目が描かれ、柱には原色を使って龍や花が浮き彫りにされている。

こう説明すると奇妙奇天烈な宗教かと想像されるが、それなぜかまたなんとも心地いいのだ。清潔感があってきれいな信者の衣装、中国風の弦楽器の伴奏に二百人はいるであろう信者の声が高い堂内に柔らかく響く。外は三十度を優に超す暑さなのだが、開け放った窓から風が爽やかに吹き込み、穏やかな雰囲気が本当に心地よく感動に近いものがあった。思えば日本の仏教といえども中国で儒教や道教が混じり、さらに日本の神

道に近い習俗もとりいれている。そのうえ日本人はクリスマスもやれば教会で結婚式も挙げるわけだから、こういう混合宗教には抵抗感がないのかもしれない、なんて考えてしまった。機会があれば直接話を聞いてみたいと思いつつ、タイニンの町を後にした。

いまベトナム人の七割は仏教徒で、わずかにキリスト教も他の宗教もあるそうだ。ベトナム戦争当時アメリカの侵略に対して、自分の体にガソリンをかけ火をつけて死をもって抗議した仏教の僧侶がいた。捨身供養というが、これほど純粋で激しい仏教もいまだに健在なのだろうか。人や街に漂う優しさと、かたや物量で攻めこんだアメリカ軍に打ち勝った精神的な強さと激しさ。僅か正味三日間の観光客としての滞在に過ぎなかったが、なにかベトナムの不思議さが心に残る旅だった。

お詫び

写真を掲載する予定で軽い娘のデジタルカメラ借りて行きました。ところが機械オンチのため思うところの半分しか撮れません。あげくに戻ってからなんと手違いで後半部分を消してしまい、なぜかそこに貴重な場面が写っていたのです。そんなわけでお見せできませんでした。

信心

働きづくめの人生を支えたもの

巻町船戸　笹川ユキさん（八十六才）

「嫁に来てからずーと働き続けの人生だった。近頃足が弱って家の中を歩くのがつまずきそうで怖いけど、畑に出るとシャンとできるからいまも野良仕事するのが一番楽しい」という笹川さん。

二十二才のとき親の言いつけでいとこ同士の結婚をした相手は、日露戦争から戻ったばかりだった。一年半後に長男が生まれたが一才の誕生日を過ぎたころ、二度目の召集で夫は戦地沖縄へ。そのまま帰ることなく、戻ったのは昭和二十年五月十五日戦死、と書かれた空っぽの遺骨箱だった。「〝暖かくていつもきれいな花が咲いているいい所だ〟と書かれた手紙が一度届いたけど、一番悪い玉砕の島だった」と当時を思い出す。

以来長男と事情があって預かった親戚の娘らの三人を養いながら、義父母と力を合わせて一所懸命に働いてきた。「優しかった義父が農地解放で得た田んぼを耕しながら山の木を採り、厳しかったが本当に仕事の段取りのいい義母が上手に花と野菜を作って、私が売りに歩いた。田畑が休みの秋と春先は毎日蓮田のレンコン掘りだった。でも二人が元気で長生きして支えてくれたからやってこれた。ありがたかった」と言う。

その義父母亡き後は田んぼを男手に任して、もっぱら畑で野菜と花を作って普段は野菜を、盆と暮れに花を売り歩いた。お得意さんが友達になったりして、商いが一番楽しかったという。

数年前野菜売りの途中自転車で転んで骨折して治りが悪く、十分働けなくなった。「若いころからお寺の団体で身延山にお参りして七面山にも五回登った。また行くつもりでいたのにかなわなくなった。近頃は屋敷回りの片付けと少しの野菜作りはできるけど、乗り物がないから普段のお寺参りもできない。春になったらきれいになった三重塔と、あの見事な桜を見ながらお参りしたい。」

育てあげた親戚の子たちも家庭を持ち、心配していつも電話をくれたり品物を送ってくれるのが嬉しい。二人の孫娘も嫁いでひ孫も大きくなった。いまは後を守る孫せがれにお嫁さんが来てくれるのを楽しみにしているという。苦労の後を感じさせない笑顔が周囲を優しい気持ちにさせる笹川さんだ。

寺の動き

ご案内多数

別ページで中越地震義援金のご報告、「一泊二日・初めての参籠修行」、お稚児さん募集、総本山身延山団体参拝募集をお知らせしています。

「ご判さま」

江戸時代から続いてきている妙光寺の伝統行事「ご判さま」を、四月二十九日（祭日・みどりの日）に執り行います。これは日蓮聖人が佐渡島へ流された際、同行した鎌倉幕府の役人の遠藤正遠が、信者となってお使えしたことを感謝した日蓮聖人からご判（印鑑）を授けられました。この地方の日蓮宗信徒がこの写しを戴いて来世へ携えた慣わしが妙光寺のご判です。

これにちなんで日蓮聖人への報恩と遠藤正遠を偲ぶ法要を「ご判さま」と呼んできました。昭和三十年代までは本格的な春の訪れを告げる近隣の盛大なお祭りとして、境内が人で溢れるほどの賑わいでしたが今はその面影を残すだけになっています。

当日は雅楽の生演奏で僧侶と稚児のお練り（行列）、大法要、加持祈祷、施餓鬼法要、お斎の振る舞い等があります。祈祷と施餓鬼法要の申込みを受け付けていますのでお申込みください。

本堂入口に香炉と鉦を置きました

本堂に参拝された方がいつでも自由にお線香を上げられるよう、入口に大型の香炉と線香を用意しました。以前からあったらいいなと思っていたら、滋賀県在住の陶芸家で中野亘さんが香炉を作って持ってきてくださいました。それならそろいで線香立てと火種の風除けをと相談したら、それも作って奉納してくださいました。

同じ頃、見附市の平井イネさんがまとまった奉納金をお送りくださいましたので、香炉台をケヤキ材で作り新たに鉦を購入して並べました。そこに札幌市の各務鈴子さんがお線香を沢山、使って欲しいと送ってこられたのです。不思議なつながりに驚き、感謝しています。どうぞお参りの際にはせいぜいご利用ください。

「三重塔」解体修理調査報告書

昨年十月に見事に修復完成なった三重塔ですが、その際の調査報告書が完成しました。文化財建築の調査を専門とされる清水徹さんが担当され、A―4版百二ページに及ぶ大作です。

これによると「記録が残っていなかったので製作者も年代も特定できない。二百年ほど前に巻町福井の曹洞宗隆崇寺で作られたものを、江戸末期か明治初期に妙光寺に移築したものと想定される。大きさが六メートルと中規模なのが最大の特徴で、建築物としての手法と模型としての手法が混在するが、骨格に関しては全く塔の様式を持った建築物であり、大きな塔と遜色はない」としてその文化財としての価値を高く評価しています。今後専門家と相談して、県指定文化財か国の登録指定文化財に申請することを検討しています。

雪の日の三重塔

文化財としての価値もさることながら、周囲に植えた木の緑がこれから濃くなってくると、塔の朱色がいっそう際立ってきれいな風景になることでしょう。五月の新緑の雨上がりが最高かもしれません。

妙光寺東京事務所

住職の双子の娘で三、四女が四月から東京で学生生活を送ることになり、その住まいとして檀徒の大滝さんが格安でマンションの一室を提供してくださいました。広いものですからここを妙光寺東京事務所として、住職が東京出張の際の拠点としても活用することにしました。七月のお盆や法事、葬式に上京の際はここに宿泊します。場所は台東区千束、地下鉄の入谷駅近くです。

中越地震被災者義援金報告

昨年の新潟県中越地震被災者への義援金を皆様にお願いしましたところ、水害に引き続いたにもかかわらず左記のように暖かいご協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

協力者数（檀信徒、安穏会員合わせて）　三九九名

義援金総計　百三十万四千二百一円

これを小千谷市、十日町市、長岡市にお住まいの十六名の檀信徒、安穏会員の方々にお届けさせていただきました。大雪で直接お伺いすることが困難でしたので、長岡市内は全て郵送し、特に地震と大雪の被害の大きい小千谷市と十日町市の二軒だけお邪魔して直接お渡ししてきました。

幸い死亡とか怪我をされた方はなく、家屋の被害だけで済んだようです。十日町市のIさんは土台、壁にひびが入り、二月にお邪魔しましたがようやく大工さんが入ってくれたと、修復工事の最中でした。被害総額はまだ予想がつかないとのこと。地震前に大きな手術もされており、当日の恐怖とその後の生活、さらに大雪で大変だったそうです。

今回同じ日蓮宗で長岡市妙音寺の本堂内部が損壊しましたのでそちらへのお見舞い金、さらに日蓮宗新潟東部宗務所を経由して新潟県庁に届け、県内被災者への義援金の一部とさせていただきました。その間にご承知の通りインド洋津波被害が発生しましたので、急遽ごく一部ですがユニセフ（国連児童基金）にも送金させていただきました。

届いたお礼状の一部をご紹介します。

「（前略）こちらは震源地に近かったり、余震の回数が多かったためもあり、揺れも相当激しく、それなりの被害がありました。交通網が乱れることの被害も大きく、さらに豪雪の影響も加わり大変な不便を感じております。／幸いにも、私共の家は一応半壊の判定を受けましたが、何とか住むことは出来る状態です。修繕には大工さんの人出の問題もあり、降雪の問題もありますのでなかなか思うようには参りませんが、やっと二月十五日から来て下さるようになりました。部分的には三月上旬には何とか形が出来ると思いますが、基礎であるコンクリートの亀裂部分の修復は雪の消える四月、あるいは五月に入るかと思われます。／

まだまだ先の見えてこない生活の中にある多くの人々に申し訳ない気持ちと、ご援助下されました方々への感謝の気持ちで一杯です。（後略）」

十日町市、Iさん。

「（私は仕事、八十四歳になる母は交通事故で植物状態の私の息子に付き添って）地震時も病院におりましたので怪我ひとつなく、その後も病院のご好意で落ち着くまでの二週間ほど病院に寝泊りさせていただきました。地震後家に帰り、やっとドアをこじ開けて入ってみたら、家具や電気製品が棚からほとんど倒れ、ピアノまで床に倒れていてガラス破片が散乱し、母が在宅していたらきっと大変なことになっていたでしょう。／また、避難所生活は高血圧の持病がある母には耐えられなかったと思うと、入院していた息子に助けられたようなものです。（後略）」

長岡市、Hさん。

「（前略）せっかくのご好意ですので感謝いっぱいで頂戴いたしました。本当にありがとうございました。実は休日前に年金を下ろして雪下ろしのお礼をしたいと考えて出かけるところだったのです。が年金も下ろさず雪下ろしのお礼をすることができるなんてなんと幸せなことでしょう。（後略）」

小千谷市、Oさん。

この他全員の方から丁重なお礼状を頂戴しました。

第二回ミニ修行体験受付け

妙光寺に泊まって一緒にお経や作法を練習し、仏教や日蓮宗について知っていただく。住職や他の方たちとも語り合いながら、過ごしてみませんか。そんなミニ修行体験のご案内をしましたら、第一回は、お蔭様で定員オーバーの十六名の参加申込みいただきました。檀信徒、安穏会員の四十台から七十台まで、ご夫婦が三組です。三月末ですので結果は第二回と合わせてご報告します。

第二回を左記の要項で開催しますので、季節も最高のとき、ふるってご参加ください。あくまでも初級編ですからどなたでもご参加いただけます。

第二回「一泊二日・初めての参籠修行」

趣旨・妙光寺に宿泊してお経や作法の基礎を練習し、住職や参加者とともに語り合い、写経を体験して修復なった三重塔に納経します。

期日・五月七、八日（土、日）

対象・妙光寺の檀信徒・安穏会員ならどなたでも

定員・十五名

費用・一人一万三千円（含一泊三食、寝具、写経用品）

申込・氏名、年齢を添えて妙光寺まで

日程・一日目　午後集合、講義、お経と作法の実習、他。
二日目　朝のお勤め、写経、まとめ練習、法話、三重塔納経法要、昼食後解散。

＊詳細は参加者に直接ご案内します。

「ご判さま」稚児募集

三百年は続くと言われる妙光寺の春の伝統行事、『ご判さま』の法要に出ていただくお稚児さんを募集します。

春の陽光あふれる境内を雅楽の演奏を先頭にお練り（行列）し、本堂で法要に参列、最後に身体健全、発育増進、学業増進のお加持祈祷を個々に行います。檀信徒、安穏会員どなたでもお子さん、お孫さんが対象です。衣装に限りがあり、定員になり次第締め切りますのでお早めにお問い合わせください。

日時・四月二十九日（祭日・みどりの日）午前九時集合、昼食後解散

対象・どなたでも。三、四歳～小学校一年生くらいまで

付添・一名

衣装・子供の白足袋だけお持ちください。付き添いは簡素な正装。

定員・男女計十名（四名は受付け済）

費用・一人五千円（含、お札、衣装、記念写真、記念品、昼食）

総本山・身延山久遠寺、七面山登詣団体参拝募集

日蓮宗総本山身延山久遠寺（山梨県）への団体参拝旅行を計画しました。宿坊に参籠（宿泊）し、二日目は希望者で七面山に徒歩で参拝します。こちらは山道四時間かかり、山上の敬慎院に参籠して翌朝真正面の富士山から登るご来光を遥拝します。七面山が体力的に難しい方は、バスで周辺の寺院参拝と観光、温泉宿泊のコースを用意します。

これまで三泊四日で実施してきましたが、希望があって日数と経費削減のため二泊三日にしました。三日目お昼までに七面山を下山して、入浴、昼食後帰路につきます。新潟着が午後九時前後を予定しています。

主催・妙光寺

期日・十月二日（日）～四日（火）二泊三日

対象・檀信徒、安穏会員、その親族友人どなたでも

定員・四十五名（大型バス一台）

費用・概算で五万円を予定（七面山登詣しない方は温泉宿泊代が加算されます）

行程・一日目　新潟→身延山（参拝）、宿坊泊。

二日目　A班　身延山→角瀬……七面山（参籠）

B班　身延山奥の院→諸寺参拝、観光→温泉泊

三日目　A班　七面山……角瀬→新潟

B班　温泉宿→角瀬散策（A班と合流）

＊費用等の詳細は再度ご案内しますが、受付けは開始します。

あんのんのページ

ある家族葬

会員のDさん（五十八才、女性）は数年前からガンを患い、二人娘を嫁がせたこともあって昨年春に「杜の安穏」を申し込まれた。抗がん剤治療で入退院をくりかえすなかで、状態がいいとご主人の運転する車で愛犬を連れてよく妙光寺を訪れ、お参りしたり境内を散策したりしていた。

「ここに来るのが一番の楽しみで、安らぎになるんです」と、とても病気には見えない明るい笑顔と笑い声でよく立ち話を交わした。八月のフェスティバルには二日間通い、十月の授戒会にも元気に参加して研修を受け、生前戒名を受けられた。寒くなったから少しご無沙汰かななんて思っていた。

三月初めというのに吹雪きになった寒い日の深夜二時過ぎ、Dさんのご主人から電話があった。「今しがた女房が亡くなりました。このまま妙光寺に行って葬儀もさせてもらいたいんですが……」と。すぐ葬儀社から病院に迎えてもらい、寺に到着したのが四時前。枕経のあと日程を相談、通常なら翌々日の葬儀だが友引なので避けたいとの意向から、その日のお通夜で翌日に葬儀となった。家族だけでやりたいとのことで、準備も火葬に関する手続きが慌しかったくらいで何の心配も無かった。本堂が式場だから故人が好きだった生花を飾るだけで祭壇もいらない。

付き添って丸二日寝ていないというご主人が、「暮れに容態が悪化してあと三週間と言われたのに正月も一時帰宅し、その後奇跡的に回復してここまで頑張ってくれたんです。その間私の心配ばかりして…。亡くなる四日前にお寺のご本尊様の夢を見たと言うんです。しかもご本尊様が笑ってらしたって。そうかよかったな、と私応えましたが、ああこれで終わりだなって、覚悟しましたよ」。

夕方本堂でお通夜の法要を営み、客間で棺を前にテーブルを囲んだのは住職とご主人、二人の娘さん夫婦と二人づつの子供たちで十人。故人の若い頃の話、子育てのこと、長女が結婚の際のエピソードから日々の交流、そして発病…。思い出話が尽きることはなかった。中学生、小学生、そして幼い四人の孫たちまでもが「おばあちゃん…」と言っては眼を赤く泣きはらしていたのが印象的だった。

「病気はつらいけどこうなってからお父さんが仕事を止めて、ずっと傍にいてくれたことが何より嬉しかった、ってお義母さんが言ってたよ」長女の夫が故人の頬をなでながら言った。「そうか俺は聞かなかったなあ。不器

用だから仕事と看病の両方はできねえんだよ」とご主人は応えると、「苦労かけたなあ…」大泣きして棺にもたれかかった。外は吹雪で冷え込んだ夜、部屋の中は心から暖かかった。

翌日はきれいに晴れ上がり、三月の日差しに昨日までの雪がまばゆかった。東京から駆けつけた長女の夫の父親を加えて葬儀を行い、すべてを終えて「さあこれからがまた大変だ」とご主人が言いながら、ご遺骨と共に三台の自家用車に分乗して帰路に着いた。

＊夏のフェスティバル安穏は八月二十七日の予定です。

後日談

初七日が過ぎ、少しづつ整理を始めたなかに大学ノート五冊に書き残された闘病日記が見つかった。そこは抗がん剤治療の始まった五年前の平成十二年五月から、亡くなる半年前の十六年秋までほぼ毎日の思いが記されていた。

「私にもしものことがあったら、○○寺にはしないでください。坊さんはいりません。お別れ会にして、骨は川に流してください。死に顔は見せないでください。お経の代わりに箏のテープを流してください。長い間お世話になりました。お父さんには何のお返しもできなくて、すみません。△△さん、××さん…さん、みんな仲良く、これからお父さんをよろしくお願いします。ただ焼くだけでよいです。お金はかけないでくださいね。本当にお世話になりました。楽しい思い出大切に胸に抱いて永遠の旅にでます。また会えたときはお父さん私を嫁にもらってください。今よりもよい家庭ができると思います。本当に感謝しております。お金ばかりかかって申し訳ありませんでした。」

ご主人曰く「一番ショックが大きかったころの文章です。私が仕事を辞めたのに、抗がん剤治療にものすごくお金がかかって心配してたんですね。医者から 奇跡的と言われましたが回復し、このあとどちらからともなく同時に言い出して安穏廟を決め、本人から戒名を望んでお葬式もでしょ。心からの落ちつき先を求めていたんですね。ご前様には感謝してます」と、住職冥利に尽きる言葉をいただいた。

夏のフェスティバル安穏

今年は第十六回になりますが、八月二十七日（土）を予定しています。納得のいく葬儀のあり方をテーマにしようと、準備を進めています。ゲスト講師は未定です。

さらに昨年秋の三重塔修復法要で大好評でした、佐渡の『鼓童』に演出と演奏をお願いして、新たに灯篭流しと交流パーティが決定しました。世界の舞台で活躍する『鼓童』の力強くまた叙情溢れる太鼓と笛などの音が、夏の妙光寺の境内に流れます。楽しみにしてご予定ください。主要メンバーは現在アメリカ公演中ですが、事務局との二回目の打合せを近々佐渡で行います。

寺庭から

「巣立ち」

小川　なぎさ

来るべきときがやってきた。双子で三女、四女が高校卒業、そしてここを離れる春だ。これで八年間にわたった毎日の学校の送迎から開放されて、弁当を作ることもなく、その他子どもたちの雑事から自由になれるので、新しい生活がはじまるときのように少しわくわくしている。娘が部屋として使わせてもらっていた寺の二階の客間で引越しの準備をしながら、四月から何をしようかとあれこれ考えるのもまた楽しい。

思えば家庭とは言わないで、寺庭（じてい）という言葉があるくらいの特殊な環境で四人の娘は育ってきた。仏さまからいただくご飯を食べ、檀信徒の方々からたくさんの食べ物を頂戴して大きくなった。節目にはお祝いをいただいたり、遠方の名産を送ってくださったり、近くの方々は子守をしてくださったり、またなによりとても優しくしていただいたことが、私や娘たちの糧となっていた。本当に数えきれない多くの恩を受けてここまでやってきたことに、しみじみと感動し、感謝の気持ちでいっぱいだ。ありがとうございました。

荷物の何もないがらんとした部屋は、ここが子ども部屋だったという痕跡はまったく残っていない。昨年出て行った次女は帰省しても自分の部屋がないのは少し寂しいと言ったこともあったが、子どもにとって育った家というのは長い人生のわずかな期間を過ごす場所にすぎないということを、いずれわかるときが来る。

私は娘ばかりだし、最期は安穏廟に眠ろうと考えている。「国やぶれて山河あり」と言ったのは誰だったか。私たちがここで暮らしたなごりは何もなくなっても、お寺と山とお墓はずっと残るものだし、子育て中の戦友ともいえる大切な地元の友人たちもこの角田の地に眠るだろうから。

鳥や動物の親はひなを巣立たせたあとには、何事もなかったように平然としているように見える。はたして自分はどうなるのか。今から寂しがっているのは一人親元に残っている長女だし、四月からは犬のモンタだと思う。

行事案内

春のお彼岸法要　三月二十日（休日）

午前十時半―安穏廟法要
　十一時―彼岸会法要（本堂）
　十二時―おとき
午後　一時―お説教（住職）

・ご参拝ください。おときはどなたでも当日受付けで申し込んでいただけます。

「ご判さま」四月二十九日（みどりの日）

午前八時半―受付け開始
　九時半―説教
　十時半―山門法要・お練り
十時四十分―稚児音楽大法要・お加持
　昼―おとき
午後十二時五十分―住職説教
　一時半―施餓鬼法要

・檀信徒の皆さんには事前に志納袋（施餓鬼塔婆、祈願申込み）をお配りします。お申込みください。祈願は午前の大法要で読みあげ、お札を差し上げます。施餓鬼塔婆は午後の法要で塔婆を立てて、読みあげ回向します。
・法要に出るお稚児さんを募集します。詳しくは寺の動きのページをご覧ください。
・今年のお手伝いの当番は巻・割前地区です。また角田地区の皆さんには事前ののぼり立てと当日の輿かつぎ、それぞれお願いします。

あとがき

三月に入ってもなお雪の日が続きどうなることかと思いましたが、晴れると日差しは確実に春の光です。昨年末、暖か過ぎてここでも桜が一部狂い咲きしましたので、この春の咲き具合が心配です。

私事ですが本文中にもあるように、四人の娘のうち地元大学に通う長女を残して三人がここを離れます。四月からどういう生活のリズムになるのか想像つかないのですが、本誌の発送作業はじめ犬の散歩係まで、人手が減ることだけは確実です。そのうえ今年は花粉の大量発生だそうで、花粉症のほうも心配してなんとも気の重い春の到来です……。

まあなんとかなるさで乗り切っていくことにします。暗いニュースの続く毎日ですが、気持ちは前向きに行きましょう。

小　川